



## ～『徘徊』と呼ばない～ とは

今年の春はビックリするほど早くやってきました。おかげでケアサポートえん恒例のお花見は「葉見」になりましたが、えん庭先のタケノコも4月早々から出たので、花見弁当に少しだけ入れられました。

さて、3月25日付けの朝日新聞朝刊一面トップ記事は『徘徊と呼ばないで』でした。小見出しには「私は散歩という目的があって出かけた。道が分からず怖かったが、家に帰らなければと意識していた」とあり、『徘徊』と言う言葉の意味＝目的もなく、うろうろと歩き回ること（大辞林）とは違うというのです。

『痴呆・呆け老人』が『認知症』に変わったのは2004年。『痴』も『呆』も愚か、バカという意味です。介護保険が始まって、利用者一人ひとりと契約を交わすようになりました。「痴呆対応型」サービスを二つ持っていて、その文字が書かれた書面を本人に示すのは胸が痛みました。当事者はどんな気持ちだったのでしょうか。どうすればよかったのか、今も正解がみつかりません。「『徘徊』を言い換えよう」という提案も、当事者の気持ちを慮ってのことですから、一步前進と言えるでしょう。

暮らしネット・えんも記録などでは「ひとり外出」などとしてきました。なぜ出かけたか、目的は何だったのか、ケアする側に配慮できることはなかったか、検証なしに「徘徊＝困った行動」として片付けてしまわない、ケアする側が思考停止にならないようにするためです。

認知症の人が『徘徊』する原因は20ほどあるといいます。これまで病気の進行やそのときの状況により、さまざまな理由で「ひとりでお出かけ」されるのを見てきました。今は亡きAさんは「赤紙が来たから、兵隊に行かなければならない」と突然出かけました。招集礼状が届いたら何が何でも行かなければならない。その先は戦場。モヤモヤと不安が募ったとき、かつて最も近い感情に襲われたのが「兵隊に行く」ときだったのでしょう。女性は、夕方になると「子どものご飯を作らなければならいから、帰ります」と出て行きます。また、前頭側頭型認知症の場合、ひたすら歩きまわる行動を繰り返す時期があります。

市民向けの講座などでは「ひとりでお出かけ」なんていうのは分かりにくいので、「いわゆる『徘徊』」と括弧つきの表現をしています。このころみも「呆けた人はいいわね、何もわからないのだから」といった無理解をなくすための一步にすぎません。単に『徘徊』という言葉がなくせばよいというものではないのです。

代表理事 小島美里